

時代を遡りつつ、現代を問う

後 藤 美 緒

1. 無謀な進学希望——教育学部から社会学専攻へ

「大学院に進学したいというのは社会学の研究者になりたいということか、それとも修士を終えたら就職するということか。」正確な表現は忘れてしまったが、大意としては以上のことを問われたと記憶している。たいへん温和な指導教員の、これまで見たことのない（と当時の私には思われた）真剣な顔に内心大いに焦りながら、ここは中途半端に答えてはならないと思い、神妙な顔で「前者です」と答えた。学部3年生の2学期、卒論のテーマを考えだした時期の会話である。

翌週のゼミで、先生はテーマと環境からいくつかの大学院を提案してくださった。現在の私の専門は社会学であるが、学部は教員養成課程に所属しており受験のための専門知識や発想が足りないことは目に見えていた。そこで卒論をメインにしたゼミとは別に、専門知識を取得し、使うために文献精読の自主ゼミを開催していただくことになった。

こうして始まった二つのゼミでは、卒論のテーマが大学生の文化と政治意識を問う若者論だったこともあり、先生のご研究と学生時代について尋ねる機会が少なかった。語りからは自分が文献を読んで得たものとは違う経験が立ち現れたり、当時の出来事について異なる解釈が先生から示されたりすることがあった。それは、その時代を生きた当事者からお話を伺う、生きられた経験に接する貴重な機会だった。

すでに起こった出来事について、今いる時代の指標から評価するのではなく、その時代を生きた者たちの論理を理解し、社会と個人の間を関係を考えること。そして現在と過去の連続性と断絶を把握し、その力学を描出すること。大学院進学後は社会学のなかでも歴史社会学という方法に取り組むことになるが、学部のゼミというフォーマル

な時間に生まれたインフォーマルな会話を通じて、2000年代から盛んになる歴史社会学的なものの見方に触れたと捉えている。

ただ、先生にはご迷惑でしかなかったと思う。卒業して1年間の研究生生活の末、大学院に進学することができた。

2. 知識人論から大衆文化研究、地域研究へ

進学先の大学院では、博士論文の執筆に指定されたジャーナルの査読論文が必要というプレッシャーがあるものの、5年間の一貫制博士課程のもと、社会学だけではなく、文学や芸術学、さらには数学や工学の大学院生と知り合うことができた。また、東アジア出身の留学生たちと集まって料理を楽しみ、ときには実家にお邪魔させていただくこともあった。彼/彼女が取り組んでいるテーマや出身国や地域の実情、さらに研究以外に関心を寄せていることを聞くことで、自家撞着しそうな研究との距離の取り方を模索することができた。10年かかって近代日本における知識人と大衆の関係というテーマを設定し、社会福祉の活動から文学執筆のような芸術活動まで扱う知識人論として、歴史社会学の手法を用いた博士論文をまとめた。博士論文のタイトルは『東京帝大新人会と戦後日本』（後藤 2014）である。2026年は書籍化に向けて作業を進めたい。

書き直し作業が進まない理由は多々あるが、博士論文の構想を練るなかでその枠組みを超える資料に出会ったことが大きい。博論では、戦前の教育エリートたちの集団的営みについて同時代におけるインパクトの再考が全体の土台にあった。博論タイトルの後段にあたる戦後日本社会との連続・断絶性を問う作業を進めるうちに、分析対象とする集団から上方漫才の近代化や在阪の放送局にかかわった人物や彼らの書いたラジオやテレビ台本が残されていることが判明した。くわえて、同時期にNHKアーカイブスの学術利用が始まり、メディア史研究にメディア研究者以外にも関わりやすくなってきた。コロナ禍で資料のデジタル化が進んだが、上方漫才に関する諸資料は現物一点限り、かつ所蔵が大阪に集中しており、長期的で地道な調査を通じて明らかにするしかなかった。相模女子大着任直後に刊行された論集は、その成果をまとめたもののひとつになる（後藤 2024）。

また、いまひとつの理由として出来事の舞台となる地域に関心が向いたこともあげられる。博論では戦前戦後の東京、上方漫才と大阪表象の研究では占領期以降の大阪が舞台となったが、それを解釈するには地域史や地域研究の知見が欠かせなかった。そうして、現代の地域空間の現れ方が日本の近代化に規定されていることに気づかさ

れ、本学メディア情報学科の塚田修一先生に誘われて旧軍用地や相模原に関する研究にも着手することになった（後藤 2022, 2025）。

相模女子大学に着任した2024年は、大学院に進学したいと無謀な希望を述べて卒業した年からちょうど20年になる。資料と人との出会いを生かし、現在のなかにある過去／歴史の中にある現在を見つめながら、これからも研究を深めていきたい。

後藤美緒, 2014, 『東京帝大新人会と戦後日本——知識人のライフコース的研究』博士論文.

——, 2022, 「〈国境〉の接し方——いちょう団地の示すもの」塚田修一編『大学的相模ガイド』昭和堂.

——, 2024, 「純粋な『話芸』を目指して——秋田実『漫才時代』を読む」好井裕明他編『ボーダーと付き合う社会学——人々の営みから社会を読み解く』風響社.

——, 2025, 「二つの緑地」塚田修一・松田美佐編『大学的多摩ガイド』昭和堂.